



農場見学には口蹄疫防除のため靴の消毒と白衣とキャップの着用が必須！



牛舎の体重は約60kg！

牧場研修初体験メンバーと一緒に、よつ葉の牛さんに会ってきました！

よつ葉会の牛乳は、非遺伝子組み換え飼料を使用している14牧場の指定生産者さんが北海道十勝で生産している生乳を原料にしています。14戸の牧場はそれぞれの経営方針をお持ちで、経営規模も牛の暮らし方もさまざま。今回の研修では、JA忠類・JA鹿追・よつ葉乳業(株)酪農部のご協力を得て、昼夜放牧の坂井牧場、搾乳ロボットシステムを利用している台蔵牧場、そして少ない頭数を牛舎で飼いながら日中放牧も取り入れている武者牧場という特色ある3牧場と、TMRセンター(配合飼料生産施設)、十勝主管工場の見学し、酪農の現実と多様性を体感してきました。

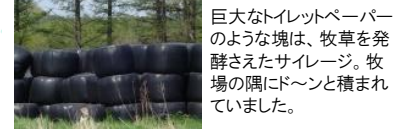
坂井牧場幕別町JA忠類

代表 坂井孝禎さん
耕地面積 43ヘクタール
飼育総頭数65頭 1日当たりの出荷乳量750kg
(よつ葉乳業(株)HPより)

放牧シーズンの牛舎は空っぽ！

放牧生産者指定ノンホモ牛乳の生産者・坂井牧場にお邪魔したのは5月18日の午後。タンポポの花の中、坂井孝禎さん・静江さんご夫妻揃って出迎えてくださいました。お二人は平成元年に結婚し、静江さんのご実家の牧場を引き継がれ、今では牧場の仕事は搾乳から牛の世話、30ヘクタールもある牧草や飼料用コーン畑の仕事をこなしています。

早速牛舎に入れていただく…あれ？子牛(♂)しかない？「その子牛たちは14日に生まれたばかりですよ。搾乳牛は5月11日から放牧地に出ています」と坂井さん。子牛は生後5日間はお母さん牛の初乳を哺乳瓶から貰い、その後は粉ミルクを貰います。2ヶ月後から広い育成牧場に預けて大きく育てられ、種付けしてから牧場に帰ってきて、搾乳牛になります。



巨大なトレットペーパーのような塊は、牧草を発酵させたサイレージ。牧場の隅にドーンと積まれています。

坂井さんは北大などが取り組む国産イヤーコーン飼料の実証実験にも協力され「乳質。乳量に問題ない」とおっしゃっていました。

放牧初日、牛はウキウキ踊っちゃう

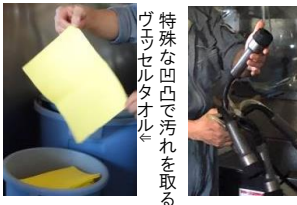
そしていよいよ、放牧場へ向かいますが、「モ〜」となく声もなく、坂井牧場はとっても静か。広い草原のあちこちで、39頭の牛たちが草を食べたり寝そべったりしています。近づくたびに「パリッ、パリッ」と牛が牧草をむしり取る音が聞こえます。坂井さんの放牧地は12ヘクタールあり、12の牧区に区切っています。順番に毎日牧区を替えて放し、12日後に最初に食べた牧区に戻ると、また伸びた牧草が食べられるようにしています。放牧地では農薬は使わず、チモシーやペレニアルライグラスなどの牧草とタンポポが混じって生えています。

「牛は牧草が育ってくると匂いでわかるらしくて、牛舎で鼻を上げてクンクン嗅いでいます。放牧の初日は朝7時に出したんですが、今年も嬉しそうに小躍りして、放牧地に着くと走り回ってね。10月いっぱいまで搾乳以外は夜も放牧です。雪が降って、放牧地ではなくパドック(運動場)で草をやると「え〜！パドックなの？」という顔をします」と坂井さん。外が大好きな牛ですが、坂井さんの声を覚えていて「お〜い」と呼べば「搾乳だね！」と牛舎にちゃんと帰ってくるそうです。私たちにも好奇心いっぱい！触れそうなくらい近寄ってきてくれました。

放牧中は冬用の飼料作りに大忙し

牛は、生の牧草とよつ葉指定の非遺伝子組み換え飼料の他に、自家製の牧草や飼料用トウモロコシをビニールでラップしたサイレージという発酵飼料を食べています。6月からの収穫期は、昼食もトラクターで作業しながらおにぎりで済ませる忙しい日々が続くのだそうです

この牛舎で搾乳もしています



4つの乳房を一度に搾乳

生乳のおいしさと安全はバルククーラーが守ります

牛舎はレトロでも、乳質管理はIT技術。

昭和50年代から使っている牛舎は、朝の搾乳後に掃除されて乾燥していて臭くなく、牛の寝床には敷き藁が丁寧にふんわりと敷かれ、午後の搾乳に備えていました。搾乳はそれぞれの寝場所に坂井さんたちがミルカーを持って行き、4つの乳房を最初はタオル、仕上げにヴェッセルタオルという乳房専用の布で拭いてからミルカーをつけて搾ります。「なるべくきれいにした方がいいからね」と坂井さん。搾った生乳は、牛舎に張り巡らされたステンレス管を通して容量2.5トンで5℃以下に冷やされたタンク、バルククーラーに吸い集められます。

搾りたての生乳は牛の体温と同じ39℃程度ですが、バルククーラーに入るとすぐに11℃程度に下がります。搾乳後1時間半後には5℃以下に落ち着き、一日おきに農協の保冷車で集められてよつ葉の工場に向かいます。十勝では、どの酪農家も坂井牧場のように、バルククーラーの乳温は農協が整備したコンピュータシステムで管理されていて、乳温が10℃以上に上がると各酪農家さんの携帯電話にメールで知らせて、生乳の品質を守る仕組みになっていると聞き、安心しました。

牧場研修初体験 Aさんの感想：

牧場は初めてでしたが、牛たちの自然な匂いがして、動物園より気になりませんでした。青草が風にそよぎ、タンポポの黄色が映える風景の中でのんびりと草を食べている牛に見入ってしまいました。また、一番大変な搾乳の作業に「一頭一頭きれいにしたい」と時間をかけて接している説明などから、坂井さんが牛たちに愛情をもって接していると感じました。そうした努力があってセレウス菌が検出されることはなく、牛も一般的な搾乳牛より長生きだそうです。一番印象深いのは、「放牧の初日は、最初は心配なくらい飛び跳ねて出ていき、土が削れるくらい跳ねる。やっぱり草が一番のごちそう。」とおっしゃっていたこと。家族の話をするように優しくお話をしてくださいました。

牧場研修初体験 Bさんの感想：

牛が幸せそうでした。人が柵の中に入っても、怖がらないで好奇心旺盛な個体は寄ってきました。それはつまり坂井さんの普段の接し方が優しいからなのでしょう。坂井さんもゆったりした姿勢で仕事に取り組んでいる印象でした。放牧が始まると、牛舎を使うのは搾乳時だけ。寝るのも外、お産も外の時があり、人間の手を借りないほうが安産だったりするそうです。自然や野生の力が残っているのかなと思いました。けれど、牧場経営の現実…。牧草地は5年に1回くらい更新が必要で、外注に出すので1haあたり30~40万円と、少なくないお金が動くとうかがいました。お二人で牛の世話をする無理のない規模で、これ以上上げることもなく、このままであってほしいと願っています。

牧場研修初体験 Cさんの感想：

すでに夕方の搾乳の準備がされていて毎日取りよく作業がされているのだと思いました。坂井さんは、話を伺っている時に“アニマルウェルフェア”の単語がでてきたり、ニュージーランドでの視察研修、国産飼料の研究に参加等、少しでも改良したいと積極的な様子が伺えました。また、育成牛を自分のところではなく外注に出すことが今は当たり前の事なのか、牧場の規模の大小で違うのか…育成牛まで手が回らないのでは？とも思いました。乳温記録計の設置やミルカーやバルククーラーの自動洗浄など、ITの導入や機械の機能向上は予想をはるかに超えていました。酪農をやることは設備投資にお金がかかる、酪農家の仕事はやるのが多すぎる、という印象を持ちました。

8月は放牧シーズン真っ盛り！
草原で眠る牛のミルクが届きます
72℃15秒殺菌 消費期限/ 配送日を含めて4~5日間(冷蔵・未開封)
放牧生産者指定ノンホモ牛乳
1000ml 289円 ⇒ **特 287円**

●本品は均質化していないため、乳脂肪が浮き、上部にクリーム層ができます。気になる方は軽く振ってお召し上がりください。開封後は消費期限にかかわらずお早めに召し上がってください。

